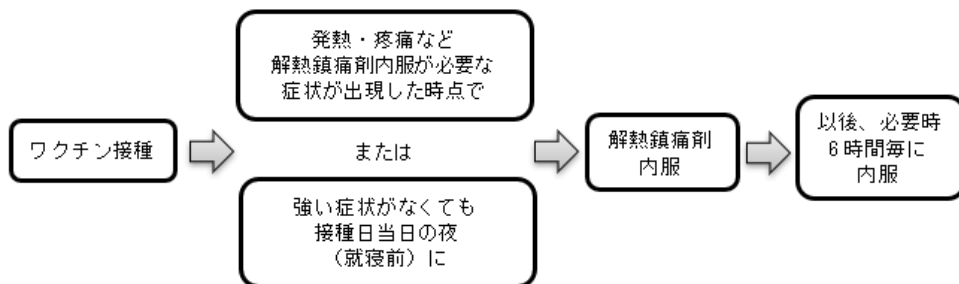


新型コロナウイルスワクチン接種後、 解熱鎮痛剤を予防内服しても 副反応の出現率は低下しない

新型コロナウイルスワクチン接種が精力的に行われている現在、接種後の副反応が大きな懸念となっています。愛育病院における医療従事者の新型コロナウイルスワクチン接種では、とくに2回目ワクチン接種後にできる限り副反応の出現を最小限にする目的で、解熱鎮痛剤(カロナールまたはロキソニン)の内服を推奨いたしました(図1)。その結果、接種後に多くの職員が解熱鎮痛剤を内服しましたが、実際の副反応の出現頻度は医療従事者向け先行接種(国立病院機構、地域医療機能推進機構(JCHO)、労働者健康安全機構の3法人の傘下病院の)の『健康観察日誌集計』(うち調査に協力する病院の医療従事者が対象) (https://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/vaccine_kenkoujoukyoutyousa.html)の報告と大きく変わりはありませんでした(表1・図2)。

(図1) 2回目ワクチン接種後の カロナール または ロキソニン(解熱鎮痛剤)内服の推奨方法



- ・ワクチン接種後に倦怠感等ある場合も躊躇せず、解熱鎮痛剤はぜひ内服することをお勧めします。
- ・新型コロナウイルスワクチンの接種前に、副反応の予防目的で解熱鎮痛薬を服用することは原則行わないでください。
- ・ロキソニンは胃腸障害と腎機能障害が起こりやすいお薬です。胃腸障害の対策として、空腹時の内服は避けましょう。腎機能障害がある方は内服に注意が必要です。

(表1) ワクチン2回目接種後の解熱鎮痛剤内服状況 (『健康観察日誌集計の中間報告』と比較)

医療従事者向け先行接種	愛育病院
13.5%	69.8%

(図2) ワクチン2回目接種後の副反応出現の状況 (『健康観察日誌集計の中間報告』と比較)



以上の結果より、以下の内容が示唆されました。

- ・新型コロナウイルスワクチン接種後に積極的に解熱鎮痛剤の内服をおこなっても、ワクチン接種後の副反応の症状出現率に差はなかった。
- ・一方で愛育病院職員の約43%は接種翌日に解熱鎮痛剤を日に数回内服しており、症状のピークを越えたワクチン接種後2日後には半分以上が内服を終了または内服頻度が下がっていたことから、発熱や痛み等の症状出現時に対する解熱鎮痛剤の対症療法としての内服は有効であった可能性がある。